

静岡・建穂寺の千手観音立像 仏師長勤作

—近世彫刻の諸相 3—

浅 湫 毅

はじめに

京都国立博物館では平成十九年度（二〇〇七年度）より四箇年の計画で、科学研究費補助金（基盤研究A）を受け「日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察」というテーマのもと調査を行なっている。その研究成果は、本誌学叢においてすでにいくつか公表され、また平成二十二年一月には中間報告会も行なった。^{①②}

静岡市建穂寺の調査も、本科研の一環として行なったものである。建穂寺は瑞祥山と称し、伝承によると飛鳥時代後期に道昭によって開かれ、奈良時代には行基が中興となったともいう古刹であるが、明治初年の廃仏のながれのなかで往時の寺勢は失われ、明治三年には廃寺となった。現在では寺地も移り規模も縮小し、観音堂が残るのみとなっているが、かつては大伽藍を構えた駿河有数の大寺院で、

久能寺などとともに駿河七観音にも数えられていた。^③

建穂寺の調査は、本調査を平成二十年二月に行ない、翌年にはすでに調査成果を公表している。^④ しかしながらその時の調査では本像、すなわち秘仏であった本尊千手観音立像は厨子の扉をあけて若干の調査を行なったものの取り出すことはできなかった。残念ながら詳細な情報は得られなかった。その後、静岡市のフェルケル博物館において、当館の特別協力のもとで建穂寺の展覧会を開催することとなり、^⑤ 檀家の方々のご厚意により、同展に秘仏である本像も出陳されることとなった。そのためにあらためて平成二十一年十月に補足調査を行ない、この時には厨子から出して写真撮影を行なうとともに、背面をふくめた詳細な調査を行なった。^⑥ さらに本年四月のフェルケル博物館での展示の際にファイバースコープを用いて像内の銘文を解読することができた。それら調査の結果、本千手観音立像に関して興味深い事実があらためて判明した。本稿はその報告である。

作品の概要

まず、作品（図版19、23）の概要から報告する。

【形状】

四十二臂通形の千手観音立像である。頂上仏面、頭上面、化仏坐像を表わす。これらはいずれも造像当初のものとみられ、頂上仏面は如来形で螺髪は表わさない。化仏は拱手し衣で手先を隠す。頭上面は正面三面が慈悲相で、以下現状では左側から左回りに瞋怒相、瞋怒相、大笑相、白牙上出相、瞋怒相、白牙上出相、白牙上出相の順となるが、背面の三面は位置が当初からは動いていると思われる、本来は背面一面が大笑相で、左側三面が瞋怒相、右側三面が白牙上出相であったものだろう。なお、白牙上出相は、十九相観の不動のように左牙が上出し、右牙が下出する。髻と地髪には毛筋を明瞭に刻む。正面では左右各二条の毛束が天冠台をめぐる。天冠台は波状（下から紐二条、列弁）で、漆箔を施す。頭髪には群青、髪際には緑青、眉および髭には群青と緑青、唇には朱彩を施す。左右とも鬘髪一条が耳をわたり、耳朶は環状に表わす。天衣、条帛、裳、腰布を著す。合掌手、宝鉢手、脇手左右十九手を表わす。

【品質・構造】

木造（クスノキによる寄木造）、素地、一部彩色、玉眼嵌入。頭部は耳後で前後に二材を寄せる。体部も前後で二材を寄せ、内部には内剝を施し大振りな丸刀で横向きに鑿目をのこす。頭体は別材で、

三道下で差し首とする。合掌手と宝鉢手の上膊は左右とも各一材より彫出し、前膊は肘先にて別材を矧寄せる。合掌手は上膊と前膊のあいだにマチ材をはさみ、手首先はさらに別材（左右を共木から彫出）を寄せる。体側には左右とも薄材三材を前後に矧ぎ、脇手はそこに直接六・七・六臂を三列に矧寄せる。背面の天衣部分は三材（中央が大きな板材、左右が小さい材からなる）を横に寄せ、鏝で連結する。足柄は前後材にわたる大振りなもので、前後とも体幹部と共木から彫出され、現状では底面で前後を鏝によって留める。足先は別材を寄せる。冠繪、頭飾、垂髪、胸飾、腕釧は金属製。

【時代】

桃山時代 天正五年（一五七七）

【法量】

像 高	一二六・二（頂上仏含む）
像 高	一一六・二（髻頂まで）
髪際高	一〇二・一 頂一顎 二六・七（髻含む）
面 長	一二・三 耳 張 一三・九
面 幅	一一・一 臂 張 三三・二（合掌手）
裾 張	二七・〇 足先開（外）一六・九（内）八・一
台座高	三九・二

【備考】

厨子入りの秘仏。

【銘文】

【像内前面墨書】（挿図1・2）

仏師長勤

但馬守

良善弁雅
越中守

松菊丸当院主増盛頼円快善 盛円良覚

本尊建穂寺 竹千代丸当寺家慶雅泉秀宮内卿良快 專尊

松安丸快遍盛遍増遍快心 法橋 慶範 宗左衛門

鳥松丸快能円識円海弁識 宗丹 縫右衛門

天正五年拾月大吉日願主松泉庵

鎌倉使長玄房

【像内背面墨書】

駿河国

覚盛大菩提

藁品郡

【台座背面墨書】（挿図3）

明治三庚午歲

六月 日

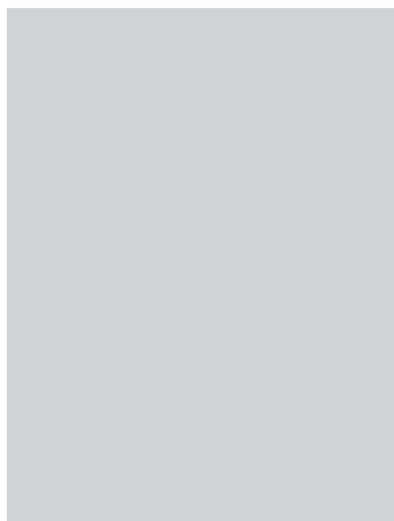
林富寺

隆恭

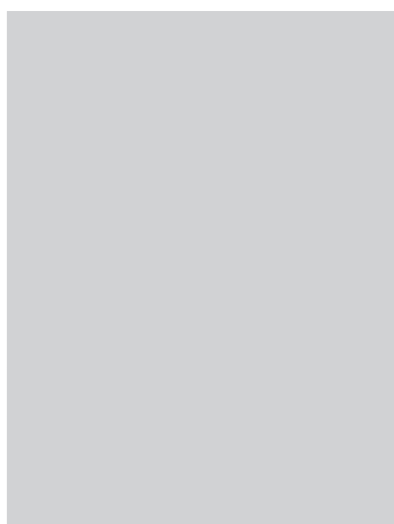
御厨子運座^{（マ）}

寄附新聞村

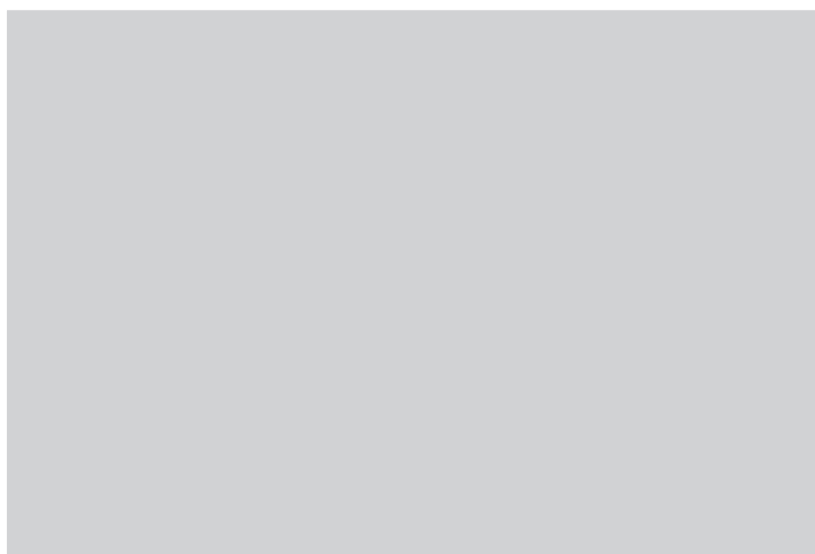
花村市郎左衛門



挿図1 像内前面墨書



挿図2 像内前面墨書
（天正五年の部分）



挿図3 台座背面墨書

銘文からわかったこと

補足調査では、本像を厨子から出すことができたので、像の背面まで確認することができた。その結果、台座背面にある銘文から、本像が明治三年の時点では林富寺（りんぶくじ）にあったことがわかった。檀家の方から聞いた話では、現在お前立ちとなつている千手観音と本像がいつのころか入れ替わり、本来はお前立ちが厨子に入っていたということであつたので、もとは建穂寺の像ではなく林富寺の安置像であつたものと、その時には考えられたのである。

この時に像内にも銘文があることが確認でき、鏡などを使って天正五年（一五七七）の造立ということはわかつていたものの、全文は解読できなかった。そこで、フェルケール博物館で展示するため像を移動した際に、ファイバースコープを用いて解読した。その結果、さらに驚くべきことが判明した。すなわち、像内前面の銘文の最も高い位置に「本尊建穂寺」とあり、天正五年十月に建穂寺の本尊として造立されたことがわかつたのである。

江戸時代の享保二十年（一七三五）に、当寺の第三十六世学頭隆賢が著した『建穂寺編年』⁸⁾によると、天正四年十二月に建穂寺の観音堂は焼亡したらしく、翌年に造立された本像は、その復興像として企図されたものと考えられよう。同書によると、観音堂自体の復興には時間がかかり、天正十四年に勧進を始め、落慶は同十八年のことであつたというから、安置堂の復興に先駆けて、本尊自体は焼失の翌年には完成していたこととなる。また、同書には建穂寺の役僧の入寂年が散見されるが、銘文に記される僧名のうち、慶賀、増

盛、増遍、弁識、円海、盛円の名が確認できる。⁹⁾

以上を整理すると、本像は天正五年に、前年に焼失した建穂寺の観音堂の再興本尊として造立された。それが明治三年に建穂寺が廃寺となるに際して林富寺へと移され、その時に新聞村の花村氏によつて台座が新補された。その後林富寺が廃絶したため、ふたたび本像も建穂寺に戻つたということになる。

また、銘文には長勤^{ちやうきん}という仏師の名が記されており（挿図4）、天正期の作者がわかる基準事例としても貴重である。

仏師長勤について

銘文に見られる仏師長勤であるが先行研究¹⁰⁾によると、十六世紀に鎌倉に工房を構えたいわゆる鎌倉仏師である。同時代の鎌倉地方では、長勤のほかに長盛、長慶など、名前に「長」の字をもつ仏師がよく知られ、同系統の仏師とみられている。彼らの作風は、鎌倉時代以来の鎌倉地方造像の系譜をひき、慶派の延長線上にあるものだが、同時代の仏師の中では卓越した技量をもつ。このような作風や、素地像を造立している点など、同時代に奈良を中心に活躍した宿院仏師にも通ずるものがある。両者の関係は不明だが、今後考えるべき課題かもしれない。

さて、長勤の現在知られている事跡は、ここに報告する建穂寺の作例を含め、管見のおよぶ限り以下の八例が知られている。

享祿二年（一五二九） 神奈川県鎌倉市円光寺毘沙門天像造立か？
弘治二年（一五五六） 埼玉県加須市医王寺薬師如来像再興
永祿元年（一五五八） 神奈川県横須賀市往生院阿弥陀三尊像造立

同 年 東京都日の出町保泉院閻魔王像再興

同 五年（一五六二） 神奈川県箱根町興福院千手観音像造立

同 六年（一五六三） 神奈川県小田原市誓願寺阿弥陀如来像造立

同十二年（一五六九） 神奈川県横須賀市本住院日蓮聖人像造立

天正五年（一五七七） 静岡県静岡市建徳寺千手観音像造立

以上の一覧からもわかるように、五十年近くにわたって造像を行った、息の長い仏師とされる^⑪。本像を除くと、これまでは神奈川、東京、埼玉の関東地方にのみ遺例が確認されており、はじめてそれ以外の場所で長勤の作例が確認されたことになる。いつてみれば長勤の遺例で箱根の山を越えた唯一の作例ということになるうか。また、これまで知られる作例で、年代のもっとも降るのが横須賀本住院の日蓮像であったから、本像は長勤の現存作例として、最後の事例ということになる。

作風的には、起伏に富む衣文表現、膝下の短いプロポーションなど、箱根町興福院の千手観音と大変似通っており、長勤の個性が遺憾なく発揮された代表作のひとつに数えられるものだろう。

クスノキを用いるということ

本像に用いられている木材の材質については、調査段階の目視で、おそらくはクスノキではないかと目されていた。補足調査時に採集した剥片を、静岡県埋蔵文化財調査研究所の西尾太加二氏に分析していただいたところ、まさにクスノキであることが判明した^⑫。

この時期に仏像の用材としてクスノキを用いることはたいへん珍しく、造像にあたって、クスノキを用いなければならない、なら

かの特殊な事情があったものと考えられる。天正四年に焼亡した観音堂本尊が、どのような姿であったかは記録も残されていないため想像するすがすがしいが、おそらくは焼亡した像も本像同様にクスノキ製であったのではないだろうか。

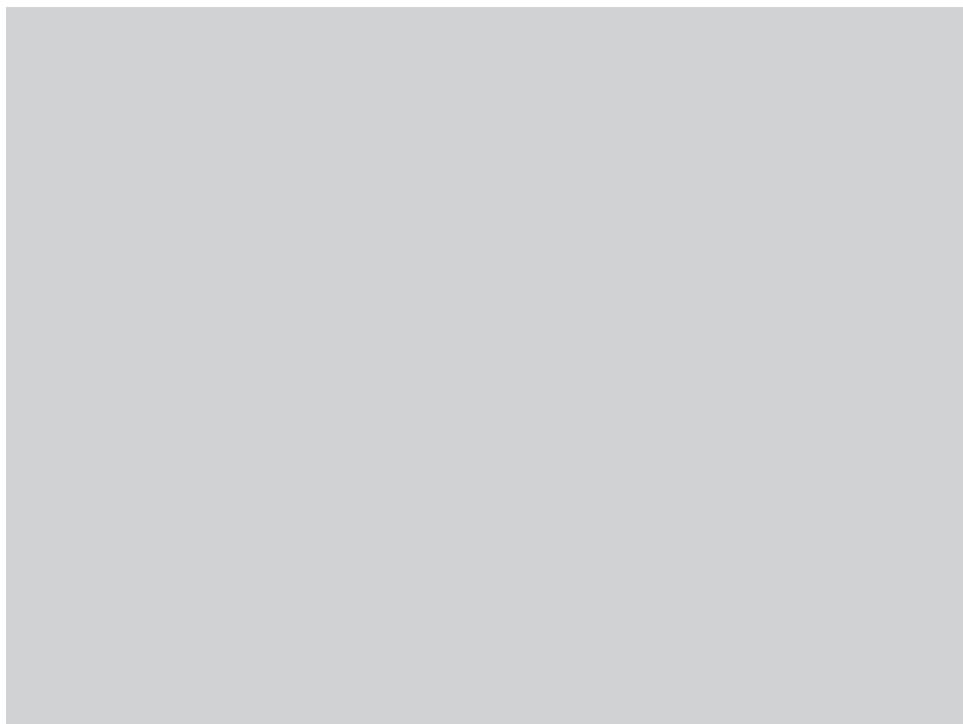
そこで思い出されるのが、建徳寺とともに駿河七観音に数えられる久能寺（鉄舟寺）の縁起である。同寺の縁起によると、久能寺は推古天皇の時代に久能忠仁が草堂を建て、五寸あまりの小千手観音像を安置したことにはじまるという。その後、養老七年（七二三）に行基がここにいたって伽藍を整備し、山中のクスノキをもって、みずから千手観音を刻み、さきの小千手像をその胸中に安置したという。すなわち、行基によって中興された久能寺の本尊である千手観音は、クスノキ製であったと伝えられているのである^⑬。

建徳寺も行基が中興したという寺伝をもっており、その本尊もクスノキ製であったか、あるいはクスノキ製との伝承があったとしても不思議はない。おそらくは天正五年の再興にあたり、そのような状況、あるいは伝承からあえてクスノキが選ばれたのであろう。

おわりに

以上、昨年の補足調査と今年四月の展示に際して行なった調査でわかった事実を報告するとともに、それらから考えられることをいくつか述べてきた。確かなことは、本像が、本来は天正四年に焼失した建徳寺観音堂本尊の復興像であり、仏師長勤によって、当時としては珍しいクスノキを用いて造立されているという事実である。その結果に基づき、いくつか想像を交えながら、造像の経緯を考察

してきた。近年研究の進んできた中世末から近世にかけての貴重な一事例として、本像をここに報告する。本小論が近世彫刻史の一資料となればさいわいである。室町時代末から桃山時代にかけての東西仏師の交流など、まだまだ考えなければならぬ問題は山積しているが、今後の課題としたい。



挿図4 像内墨書（仏師長勤の部分）

〈註〉

- 1 拙稿「八坂神社西楼門の隨身倚像―近世彫刻の諸相 2―」『学叢』三〇 京都国立博物館 二〇〇八年
- 2 拙稿「静岡・建穂寺の彫刻」『学叢』三一 京都国立博物館 二〇〇九年
- 3 平成二十二年一月十五日に、京都国立博物館において開催された。概要は当日配布した資料集を参照。
- 4 建穂寺のほかは、久能寺（現・鉄舟寺）、平沢寺、靈山寺、法明寺、増善寺、徳願寺よりなる。いずれも千手観音を本尊とし、行基伝説を有する。
- 5 本調査は平成二十年（二〇〇八）二月二十五日より二十八日の四日間にかけて行なった。調査者は京都国立博物館調査員（当時・現和歌山県立博物館長）の伊東史朗氏、同志社大学文学部教授の井上一稔氏と筆者の三名である。成果は報告書（前出註1）として公表している。
- 6 『特別展 建穂寺の仏像 ―栄華を残す駿河七観音のひとつ―』（会期：平成二十二年四月三日～五月九日）
- 7 補足調査は平成二十一年十月二十九日より三十一日にかけて行なった。調査は井上一稔氏、大津市歴史博物館の寺島典人氏と筆者の三名で行なった。
- 8 林富寺に関しては詳細は未詳だが、現在建穂寺の観音堂が建つ場所にあったという。
- 9 原本は上下二巻からなり、現在見性寺に所蔵される。現代語訳が建穂寺の歴史と文化を知る会より一九九九年に発行されている。
- 10 『建穂寺編年』によると慶雅は天正十六年（一五八八）、増盛が同十九年、増遍が慶長十二年（一六〇七）、弁識が同十七年、円海が寛永八年（一六三二）、盛円が同十一年に没している。これから判断すると、上方に名前の記載される慶雅、増盛、増遍が、造像当時の長老格であったようである。
- 11 長勤に関する先行研究には、管見の限り以下のものがある。
- 12 上杉孝良「横須賀における鎌倉地方仏師の事蹟について」『鎌倉』一六 鎌倉文化研究会 一九六七年
- 13 三山 進「円光寺の室町彫刻」『史迹と美術』四八六 史迹美術同致

会 一九七八年（後に同氏『鎌倉彫刻史論考』有隣堂 一九八一年に所収）

山田泰弘『鎌倉の在銘彫刻Ⅱ 鎌倉国宝館図録第二十八集』鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館 一九八六年

清水眞澄『小田原の彫刻史と「小田原仏師」』『おだわら―歴史と文化―』一二 小田原市役所企画部市史編さん室 一九九九年

林 宏一『弘治二年再興銘を持つ騎西町医王寺の木造薬師如来坐像について』『東京家政大学博物館紀要』一〇 東京家政大学博物館 二〇〇五年

浅見龍介『室町時代 東国の造像』『室町時代の彫刻 中世彫刻から近世彫刻へ』（根立研介著・日本の美術四九四）至文堂 二〇〇七年
鈴木 泉『川崎市大楽院・木造釈迦如来坐像考―主に胎内墨書銘の検討から―』『日本美術史の杜 村重寧先生・星山晋也先生古稀記念論文集』竹林舎 二〇〇八年

11 享禄二年の円光寺毘沙門像については「長勤」ではなく「長勒」とする三山氏、清水氏（前註10）の説がある。この時点で法眼を名乗っていることを考えると、筆者も長勤とは別の仏師、すなわち長勒である可能性が高いかと考える。本稿で一覽に挙げた長勤作とされる像のなかに、あるいは長勒のものが含まれている可能性もあるかと考えられるが、本稿ではひとまず通説に従った。仏師長勤に関してはあらためて論じることとしたい。

12 西尾太加二「建徳寺仏像の樹種」『特別展 建徳寺の仏像』展覧会図録 フェルケール博物館 二〇一〇年

13 現在の鉄舟寺観音堂の本尊千手観音立像（静岡県指定）はクスノキではなくヒノキかとみられる針葉樹が用いられている。詳細は拙稿「古代檀像彫刻の一遺例 ―静岡鉄舟寺の千手観音立像」『学叢』二十四（京都国立博物館 二〇〇二年）を参照。

〔付記〕

本像の調査にあたっては、建徳町内会の皆様、静岡市教育委員会、フェルケール博物館より多大なるご助力、ご厚意を賜った。また、本稿執筆にあたり林宏一、鈴木泉両氏より助言および資料の提供を受けた。文末ではあるが

記して感謝申し上げる。

本像の調査および本稿は、京都国立博物館が平成十九年度より受けた科学研究費補助金基盤研究（A）「日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察」（研究代表者・佐々木丞平）による成果の一部である。